

ローズウェルなんか知らない



篠田節子 著
講談社（2005年7月10日発行）
定価：1700円＋税

道草はない、名所はない、歴史はない。在来線の駅からバスで40分、高速道路のインターチェンジから80分かかる。かつては首都圏から最も近いスキー場として、高校生のスキー合宿で栄えたが、今はスキー場を運営する企業が撤退し、表道の一本を辿るまち・駒木野町。本書は、そんな日本のどこにでもある田舎のまちを舞台とした「町おこし小説」である。2030年に駒木野町の人口がゼロになるという推計結果を受けて、駒木野町の元若者たちが町に人を呼ぶために様々な企画を立ち上げ、住民との衝突や失敗を繰り返しながら、町を盛り上げるため奮闘する。「超常現象が起こるまち」として売り出すため、人工で遺跡を作ったり、閉鎖された遊園地を勝手に改良して観光スポットに仕立てたり…。最終的には偽造や嘘が発覚し、日本中から批判を浴びることになるが、自分たちの地域を良くしたいという思いが伝わる内容となっている。

作中に、「産んで死を待つよりは」といった青年クラブの発言が出てくる。何もしないで衰退するのを待つよりは、何かやってみようという気概が感じられる。物語の中心に、駒木野バスター参加者からのアンケート結果を受けて、長宿の持帰や売事を見直すなど自分ができることから環境を変えていく描写がある。そうした意識改革や環境改善によって、成功体験を重ねることで非協力的だった住民も一緒に町おこしに取り組んでくれるようになるなど、物語が進むにつれて登場人物も前向きに変わっていく。

小説ということでフィクションの世界ではあるが、本書を読むことで一緒に町おこしをしている、成功体験を重ねていくような気分を味わうことができる。なお、本書の巻末に参考文献の一覧が掲載されているが、本誌「地域づくり」も参考文献として記載されている。

田舎の力が未来をつくる！
ヒト・カネ・コトが持続するローカルからの変革

金丸弘美 著
合同出版（2017年11月7日発行）
定価：1600円＋税

人口減少が社会問題となっている日本において、それを補完する役割を担うのが「交流人口」の拡大である。中でも外国人観光客の誘致を大きな政策として掲げており、その数は2005年の約673万人から2016年には約2400万人へと大幅に伸びている。

このように日本への外国人観光客が増えている一方、彼らの訪問・滞在先は東京、大阪、京都といった大都市圏が中心となり、地方への影響はほんの一部となっている。加えて、都市部では宿泊施設が不足するなど、都市と地方との間で様々な問題が生じている。

本書では、このような日本の課題を踏まえ、観光誘客で国際的な地位を得ているイタリアの「農村宿泊観光」に注目し、具体的な事例にも詳細に言及している。また、こうした流れを日本で成功させた先駆者たちを取り上げ、高い収益を上げて雇用を増やす手法やマーケティングを用いた経営手法など、新しい未来を見据えた先進事例を数多く掲載している。

地域に入り徹底的に調査している著者だからこそ見いだせる、国内外の事例を豊富に取りそろえた地方創生のバイブル的存在となるだろう。2020年までに農村観光需要1450万人という、政府の掲げた目標への道標となる1冊である。

明日をむかへる地域活性化のための理想郷

地域づくり

2017
12
NOV. 2017

本編



官民で取り組む地方創生

本誌は、空しく社会貢献活動等として助成を受け付されたものです

